



TITLE:

最近入手した特大の貝殻

AUTHOR(S):

久保田, 信

CITATION:

久保田, 信. 最近入手した特大の貝殻. 本覺寺杼貝 2017, 81: 31-33

ISSUE DATE:

2017-05-21

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/224990>

RIGHT:

本 覧 寺 貝 (81), 2017

最近入手した特大の貝殻

久保田 信

Shin Kubota: Giant shells recently obtained

〒649-2211 和歌山県西牟婁郡白浜町 459

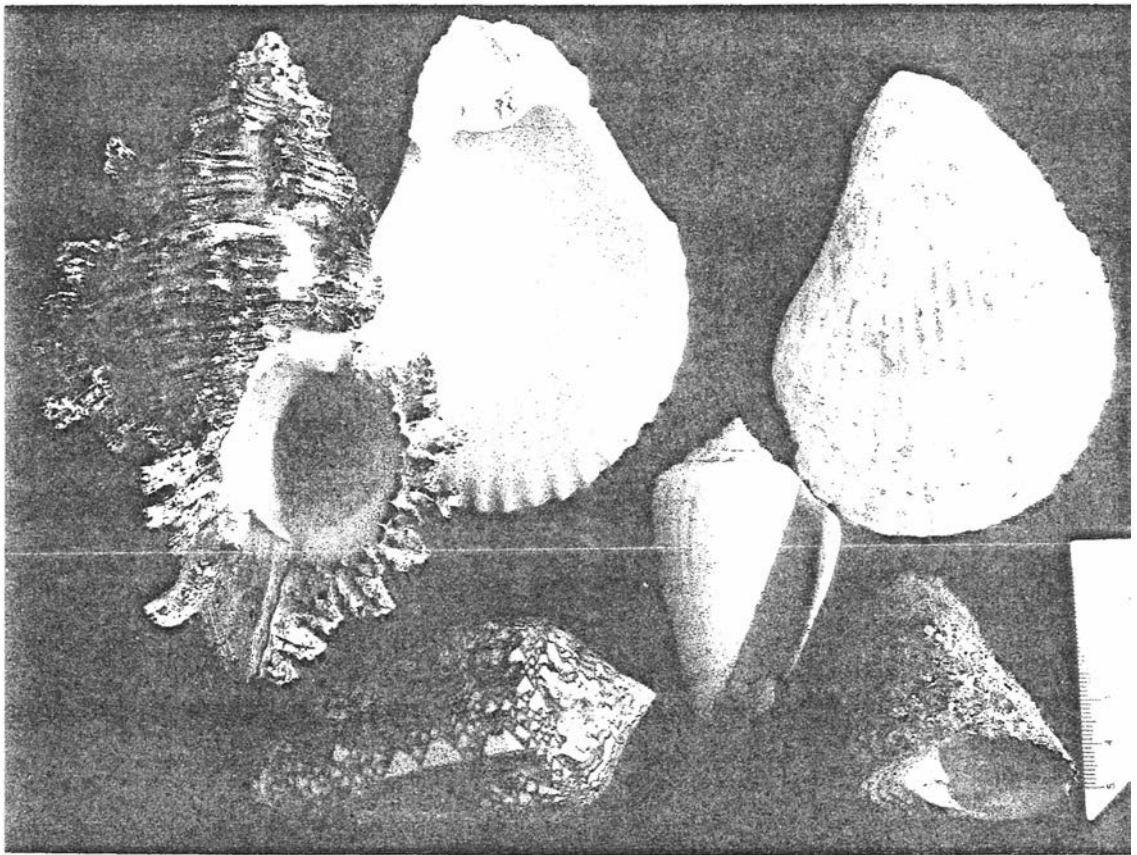
京都大学フィールド科学教育研究センター 瀬戸臨海実験所

軟体動物は貝殻を持つ種が多いが、貝殻をどれほどまで大きく成長させられるかという点について、卑近な例だと、和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所付近に普通に生息するヤクシマダカラの一例では、“蚤の夫婦”様成体の記録がある（久保田，2012）。それ程の大小差があるとは言えど、各種には成体サイズの限界が定められており、ヤクシマダカラは決してホシダカラのサイズには成長できないであろう。

貝殻の巨大化にも興味ある著者は、クラゲの系統分類を専門とする。かのエチゼンクラゲを日本海でじかに観察・採集した時には眼を見張る以上の手ごたえがあった。人生初遭遇のエチゼンクラゲ個体は、直径 2 m・体重 200 kg には達していなかったものの、その半分位のサイズで、普段相手にしているライフワークの一材料のカイヤドリヒドラクラゲの直径が 1 mm 程度（久保田，2017）なのと比べ、

化け物に相違なかった。軟体動物に限っても種々の特大貝の思い出があり、オーストラリア・ケアンズのオオシャコはじめ、自身で採集し観察できたエガイ（久保田，1999）やマツバガイ（久保田・鳥越，2000）等が脳裏に浮かぶ。

本記録では 5 種の特大貝殻を写真（図 1）で紹介する。それらは 2017 年 4 月 15－16 日に和歌山県白浜町で開催された「日本貝類学会平成 29 年度大会」時に並設された「2017 白浜ミニシェルショー」に、阪神貝類談話会の一員として参加した折に入手したものである。入手時にラベルが付されている種もあり、筆者が吟味の上、その和名を踏襲したものには＊を付した。



- ・ センジュガイモドキ* (図 1, 左上) 殻長 133 mm,
殻幅 76 mm 和歌山県南部堺沖水深 30 m
- ・ タガヤサンミナシ* (図 1, 左下) 殻長 94.5 mm,
殻幅 45 mm 和歌山県南部堺沖 1989 年 12 月採集
- ・ ミノガイ (図 1, 右上) 殻長 82 mm, 殻高 109 mm
- ・ オオコシダカガンガラ* (図 1, 右下) 殻長 47 mm,
殻幅 48 mm 長崎県茂木海岸
- ・ マガキガイ (図 1, 中央) 殻長 70 mm, 殻幅 38 mm
(久保田, 2011 参照)

参考文献

- 久保田 信. 1999. 鹿児島県加計呂麻島で発見された
巨大な 2 個体のエガイ(二枚貝類, フネガイ科)の
生貝. 南紀生物, 41(2): 106.
- 久保田 信・鳥越 兼治. 2000. マツバガイ(軟体動物門,
原始腹足類)の大形個体. 南紀生物, 42(2): 99-100.
- 久保田 信. 2011. 和歌山県白浜町産の特大のマガキガイ
(軟体動物). くろしお, (32): 12.
- 久保田 信. 2012. 和歌山県白浜町産ヤクシマダカラ
(腹足綱: タカラガイ科)の最大と最小の成貝.
Molluscan Diversity, 3(2): 97-98.
- 久保田 信. 2017. In “新・付着生物研究法”, カイヤドリ
ヒドラ類(ヒドロ虫綱有鞘類)の分類の変遷と系統,
pp.26-34, 口絵 7-12, 恒星社厚生閣, 東京.